



わたしの聖戦

女性が働くことについて

135

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

スマホの是非に迷う

近年、電車の中の風景が一変した。スマホの画面を一心不乱に見ている人がものすごく目立つようになった。あるときなど、前の長椅子に座っている人全員がスマホを見ていたこともあったし、両隣に立っているふたりと目の前に座っている人がなぜか同じゲームの画面をいじっていたこともあった。

かつて、ひとりで電車に乗っている人は、眠っているか車窓を眺めるか読書をしているか、のどれかだったが今や圧倒的にスマホ人口が増えている。調べたところ、スマホがはじめて日本にお目見

えしたのは2004年のことだという。10年足らずで着々と普及し、ついにここまで来た。あつぱれというべきか見事というべきか。

便利なものは弊害も多いというのは世の常だ。インターネットもスマホも依存症やいじめなど人々を蝕む世相を含んでいるが、それでもスマホを手放す人はそれほど多くはなく、新しい機種も次々と登場している。一方で、昔ながらの携帯電話は、その希少価値からガラケーと呼ばれている。ガラケーとは他から隔離されて独自の進化を遂げてきたガラパゴス島の生物と、これまた世

界とは別の形で発展してきた日本の携帯事情を引っかけた呼称である。おおざっぱに分けると、スマホ世代にはおしなべて若者が多く、ガラケーを持つているのは中高年が目立つ。スマホはいわば小型のコンピュータなので、通話のためには



仕事でメールやインターネットを駆使するもの、従来からのパソコンを重宝しているためスマホにもタブレット端末にも縁がない。どちらかといえば、講義の最中に、こっそりスマホを使っている学生を片っ端から注意をするのに気を取られている

従来の携帯電話のほうが都合の良い場合もあり、両方保持している人も珍しくない。また、タブレット端末といったものもあり、こちらは電話機能のないやや大型のスマホ。パソコンに近いともいえる。残念ながら、私自身は

て、スマホは困ったものだという思いのほうが強い。いわばありがちな中高年というわけ。ところで、知的な遅れはないのに、学習面の、ある特定分野に支障があり学習していく上で困難が生じるケースを学習障害という。文字が書けない、読めない、算数が理解できないなどなどで、発達障害のひとつと位置付けられている。なんと一クラスに一人は学習障害であるという統計もあるほど増えている。その支援の一環として、スマホやタブレット端末

のアプリが活用されている。たとえば、文字の読み書きが困難な子は、音声機能のあるアプリを使って理解を深める。そうすることで、他の子に遅れを取ることなく授業をこなしていくことができるといえる。私はテレビでその様子を見て、学習障害の実際を知り、またアプリの多様性を見ることで驚き、とても驚いた。スマホ依存症などが問題になっている一方で、使っていることによって子どもの可能性を伸ばすことができる。機械に使われることなく有効に活用する好例だと思った。

しかしやはり、これら一連のコンピュータにどこか危うさを感じてしまっている。私だけだろうか。そろそろ携帯の替え時なのだが、ガラケーにしようかスマホにしようか、なかなか悩み深い今日この頃を過ごしているのである。イラスト・伊藤栄章